



# 柏戸の真実

## 姉喜久子が生きていたら(中)

昭和25年に嫁入り

櫛引地域の東地区黒川と西地区山添の間を流れる一級河川・赤川は子どもたちの遊びと冒険の場だった。黒川橋は今の日帰り温泉「ゆくTown」のそばにあり、橋脚の下に浅瀬があった。

終戦時7歳だった剛少年は同級生から頭一つ抜けるほど大きかったが、3歳年上の長男・勝がガキ大将タイプで、その指示や言い分けは守った。2人で一緒に楽しんだのが魚釣り。丸い水中眼鏡は「ダンコ」と呼ばれ、装着し潜っては川マ

月、「剛や、元気でいてよ」と言い残して、19歳で隣村に嫁に行った次姉・喜久子を気遣う思いはあったが、中学生に上がったばかり。同級生たちとバスケットボール、サッカーなどクラブ活動に夢中の日々を過ごしていた。

### 姉急変、急性肺炎

だが嫁に行ったばかりの姉の急変が伝わってきた。慣れない環境で体調を崩したのに「働かないと認めてもらえない」と無理して家事に農作業に働いた。その



### ペニシリン入手頼り

東京など首都圏ではだいぶ流通してきたが庄内ではまだ高根の花。それでも父・元雄が村会議員をしていた関係があって、役場を通じて山形市の病院に届いたという情報が入った。急ぎ、

20歳の柏戸。富樫から改名したばかりの頃だ



黒川橋は山添と黒川をつなぐ主要道路だった。今は王祇橋に役割を渡し、車両は通れない

余り。25年7月19日だった。山形市で火葬され、父が骨壺を抱き、実家に戻ってきた。

（富樫 嘉美）

入院の手續きが取られた。両親と兄・勝が漕ぐりヤカに寄せられ、約8きの道のりを国鉄・鶴岡駅に運ばれた。「大丈夫だ。少しの辛抱だぞ」。家族は励ましたが、グッタリした喜久子は反応が少なかった。そして両親に付き添われ、山形駅に到着したが、すでに意識はなく、救急車で運ばれた病院で死亡が確認された。嫁入りからわずか3カ月半

剛4年後角界入り

剛の角界入門は姉が亡くなった4年後の29年秋場所。山添中卒業後、兄に連れられた東田川郡相撲大会で活躍し注目された。また約6・5歳離れた鶴岡南高校定時に十分舗装されていない国道112号線を、黒くて重い自転車に乗って通い始めるうちに立派な体を認められ声を掛けられた。市内の学校に進学したのは勝が山添高に進み「兄から離れ、街の学校で伸び伸び学校生活を送りたい」という剛の気持ちを優先させたものだった。

火曜日付掲載予定